

あるジャーナリストの集中講義

朝日新聞で第一線記者としてグローバルに活躍し、多くの著書を刊行し大学で教鞭をとられた浅井泰範先生の集中講義が8月初旬にあった。人文社会学部創設からの夏恒例の集中講義であり、講義開始前や休憩時間に先生と話をするのが楽しみにしてきた。

今回はじめて講義の最後の時間帯に聴講させてもらった。朝日新聞社の紹介DVDのあと、新聞をとりまく環境変化、ジャーナリストの心構えなどが熱っぽく語られた。浅井先生は名古屋出身で1959年に朝日新聞に入社された。同期には筑紫哲也さんなど著名なジャーナリストがいる。入社時は30人が記者として採用されたが、女性は1人だけで現在とは大きく異なっていた。入社した1959年に名古屋を襲った伊勢湾台風は今でも忘れられない。

新聞メディアにとって最大の課題は、インターネットへの対応だ。朝日 com. は新聞業界で最大のアクセス数だが、検索機能など利便性がきわめて高いYahooやGoogleには遠く及ばない。朝日はGoogleに記事を提供している。これからはコンテンツ(内容)が勝負であり、新聞が生き延びる戦略もここにある。視聴「率」よりも視聴「質」が問われ、メディアリテラシーの役割もますます高まるであろう。

ジャーナリストにとって「不易流行」という言葉が示唆に富む。釘型と画鋸型に分けられるが、これからは関心や専門も深く視野も広い2つの型をあわせ持つことが求められる。ジャーナリストは危険をともなう職業であり、まずは健康、集中力・持続力・瞬発力が欠かせない。人間が好きであること、好奇心や野次馬根性も大切だ。それと独自性を守りながら、組織・チームの一員としての自覚も必要だ。

メディアの世界は、一生が勉強であり、やりがいのある職業である。

(2009年8月11日 記)